

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號參第 卷十四第

行發日一月三年十和昭

論叢

鑛産税附加税の課税權者……………法學博士 神戸正雄

預金の積極性と消極性……………經濟學博士 小島昌太郎

第三史觀の概念……………文學博士 米田庄太郎

時論

交換貿易制より見たる吾國の貿易……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

ミロオの金なき國際交換決濟制に就いて……………經濟學士 松岡孝兒

貨幣の轉回速度の構想に就いて……………經濟學士 有井治

貨幣自體の限界效用……………法學士 正井敬次

說苑

ウィリアム・ペティーの經濟說……………經濟學士 相澤秀一

支那のボイコットに就て……………經濟學士 黒松巖

景氣理論に於ける シュピイトホフとハイエク……………經濟學士 尹行重

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

説苑

ウイリアム・ペティー

の經濟說

相澤秀一

一、彼れの經濟思想

經濟學者と醫學者との取り合はせは學史上その例を稀なりとしない。彼のフランソア・ケネーのルイ十五世の侍醫たりしは餘りにも有名であるが、今茲に語らんとするサー・ウイリアム・ペティー¹⁾も亦一度は醫科大學の解剖學教授にもなり、又或は時は軍醫總監にもなつた男である。

獨乙學者のカメラリズムと稱するものは多分の重商主義的色彩を持つ。王を富ますことは又同時に王國を

ウイリアム・ペティーの經濟說

富ますことであつた。而かもそれは富の現實的姿である貴金屬を積み重ね、又生産要素である人口を増加せしむるにあつた。茲に價值の人間の要素に着眼したことは、本來の重商主義よりの一進歩であらう。カメラリズムはそのイデオロギーとしては、多分に政策的意味を有ち理論的體系と言はんよりはむしろ一つの財務行政的な技術であつた。

十七世紀の英國に於ける政治的問題は、國家即ち國王の收入に關する問題であつた²⁾。如何にして收入ある公平な課税がなされうるかの財政問題であつた。かかる問題解決の獻策が一六六二年、ペティーによつてなされた。茲に彼れがカメラリストの性格を多分に含んでゐる根據がある。その主著『租税及び貢納に關する論策』³⁾は専ら國家經費を如何にして減じ得るであらうか？ 收入は如何にして豊かに齎らされ得るであらうか？ 租税は如何なる形態を採る可きであらうか？ 此れが彼れの中心問題であつた。國家財政に關する現實的なる技術は單なる抽象的理論ではありえない。經

1) Sir William Petty (1623-1687)

2) Vgl. Cunningham; Growth of English Industry and Commerce, Vol. 2. p. 382.

3) Treatise of Taxes & Contributions, 1662 (in "The economic writings of Sir William Petty" ed. by Hull, C. H. 1899. vol. 1.)

驗的な認識を基礎として現實社會の經濟狀態の分析を以て始められねばならない。茲に統計的數字使用の必要が起る。恰もペティーを目して統計學の創始者となすの根據も起りうる。彼れは有名なる自著『政治算術』⁴⁾の序文に於て、自らの方法を誇らかに具體的方法なりと規定する。『私の採用する方法は——と彼れは言ふ——全く珍らしいものである。單に比較的高踏的な言葉を用ひたり、又智的議論をなしたりする代りに、數、重量、度合を示す文字にて表現し、唯感覺に訴へえらる議論をのみなし、自然の上に可視的な基礎を持つてゐるが如き原因のみを考察し、特定の人々の變り易き心や、意見や、欲望や、情熱やに依存する諸原因は、之を他人の考察に委せておく』(ハル篇ペティー經濟的著作集第一卷・二四四頁)。だから彼れの主張は抽象的・思辨的な理論ではなく、數を以て主張する具體的、現實的理論である。

多くの人はペティーを以て重農主義の先驅者と看做す。『剩餘價值學說史』の著者カール・マルクスに於て

も同様である。マルクスはペティーの地代論を以て、ペティーが地代を剩餘價值の本來的な姿として把握したと主張する。

『國家の繁榮はその領土の廣大に依存するのではなくて、團結し良く統治されたる人民の數、技術、勤勉に依存する』(『租稅論策』前掲書、三二頁)。剩餘價值の地代化を認識せる彼れは價值形成過程としての人間勞働を問題とせねばならぬ。従つてかかる多數人民の經濟的活動は一國國富の増加を齎らしうることは言ふまでもない。然らば如何なる經濟活動が最も生産的であらうか。『商人は元々社會より何物をもかせぎ出しえない。唯貧民の勞働に對して互ひに賭け合ふ一種の賭博者であり、自らは全く不生産的であり、却つて政治體の血液や營養物を循環せしむる血管の如きものである』(同上・前掲書二八頁)。價值創造的活動としての勞働は、かくて農業勞働或は工業勞働に歸結せしめられねばならぬ。茲に彼れが剩餘價值そのものの源泉を生産過程にさぐり、勞働價值說の原始素朴的な理論を展開

4) Political Arithmetick, 1690. (ibid.)

しえた根據がある。然しながら彼れは此の自己の主張を一貫して唱ふるべく餘りにも重商主義的性格をその半面に有して居た。何をか重商主義的性格と言ふか。むしろここでは、モネタリス、ト・サー・ウイリアム・ペティと呼ぶが至當であらう。キラキラと光り輝く黄金白銀が、やはり彼れにとつては唯一の富であつた。破壊されることなく永久に貯へえらるる財寶に見えた。だから穀物作る勞働でもない。ましてや布織る手工勞働でもない。英國民よ船に乗れ、海の男の兒の海上貿易、これぞ黄金白銀の財寶を山と積む。

勞働價值説の創始者ウイリアム・ペティ、重農主義の先驅者ウイリアム・ペティとして、一六六二年の著に登場した彼れは、一六七一年の頃執筆せしと言はる『政治算術』に全く變つた姿で登場した。小國うれふるに足らぬ。自らその大國を倒しうる。英國は佛國を怖る必要はない。海商制覇による英國の富強化が此の著書の中心題目である。『國土の位置、貿易、政治』、此れが繁榮富強の大きな原因である。貿易は航海業と

ウイリアム・ペティの經濟説

結びつく。茲に至つてペティは商業活動の優位性を主張せねばならぬ。『農業よりも手工業がより多く收益があり、手工業よりも更らに商業は多く收益がある』(『政治算術』前掲書二五六頁)。『海上貿易は全世界商業の遂行者であり、動力者である』(同上、二五八頁)。農夫・軍人・船乗り・工匠・商人等は共に社會の大黒柱たるに變りはないが、而かも船乗りは單に航海者であるのみではなく同時に軍人であり又商人である。船乗りの勞働の生産的なることは、『イングランドの農夫の週賃銀四シリングなるに對し十二シリングである』(同上、前掲書、二五九頁) 點よりも認めらるるであらう。だから『貿易の最大終局的な効果は一般的富の豊富ではなく、特に他の商品の如くに破滅し且つ變化し易きものではなくて、何時如何なる處に於ても常に富たる金銀寶石の豊富である』(同上、前掲書、二五九—六〇頁)。『金銀は何時何處に於ても常に富と考へらるる不滅なものである』(同上、前掲書、二六九頁)。かくて英國民に課せられた使命は、『全商業世界の世界貿易の獲得』(同上、三一

第四十卷 六一五 第三號 一三三

二頁)にある。が元より彼れは干渉政策を採るものではない。『吾々は一般に—とその主著『租稅論策』に於て言ふ—賢明なる醫師がその患者に極度に干渉することなく、却つてよく觀察し、自然的作用に従ひ、極端なる獨自の處置を以て干渉せざるが如く、恰も政治學、經濟學に於ても同様になさる可きであることを考慮せねばならぬ』(前掲書、六〇頁)。モネタリスト・ペティはその限度に於てのリベラリストとなつて現はれ、『人民の一致團結、勤勉、從順こそ社會の安寧、人民各自の幸福』を齎らすものと説教しつつカメラリスト・ペティとなり終る。

二、價 値 論

稅源を考へたペティは先づ以て土地に着眼した。

土地は人間勞働との合體によつて年々地代なる剩餘價値を生む。已に人間が富の源泉と考へられ、人間勞働の價値が認識された以上、勞働過程が同時に價値形成過程であるには異論はない。然し、更らに進んで勞

働過程が價値増殖過程であるや否や、茲に剩餘價値をめぐつての一つの歴史的限界従つて勞働價値説に於ける未發展的姿態が横はる。

人間がその生産性に於て、富形成の一要素である限り、君王の收入源としての人口が、カメラリスト・ペティの眼に映ぜねばならぬ。従らに人民を罰し殺すは、君王自らその收入源を枯渴せしむることとなる。

だから彼れは、『土地が富の母であるが如く、「勞働は富の父であり又能動的原理である」との主張の結果、當然國家はその成員を殺し、或は不具にし、幽閉することによつて、その結果自らを罰しつつあるといふことを記憶すべきである。故にかかる刑罰は能ふ限り避くべきであり、それに代るに罰金刑を以てすべきである。罰金刑は勞働並びに國富を増加せしむるであらう』(『租稅論策』ハル篇第一卷、六八頁)。勞働のあるところ必ず富を生む。

剩餘價値の現象形態は賃料に於て最も鮮明に現はる。土地の賃料、貨幣の賃料、かかる一見明白なる經

濟現象は、然しながらそれを追究しゆくにつれ神祕の闇につつまれやうとする。此の闇に燈明を點ずることが、先づ經濟學父らの問題であつた。土地賃料即ち地代として映ずる剩餘價值は、その交換價值形態即ち貨幣形態に於てよりも、剩餘的使用價值物そのものとして、はより、認識を可能ならしむる。穀物地代は如何にして發生するか。『吾々は次ぎの如く假定しやう。一人の人が自身の手で一定面積の土地を、その土地の農耕に必要な通り、耕し、掘りかへし、犂き、ならし、種子を蒔き、蒔り入れ、運び入れ、打穀し、簸るといふやうなことを爲すことが出來るとし、更らに此の土地に蒔くために充分の種物を持つとする。今若し此の人が收穫の進行中、彼れの種子並びに彼れが自ら食し又は衣服その他の自然必需品との交換に與えたるところのすべてのものを控除するならば、残りの穀物は此の年の自然的にして眞實なる地代となる』(前掲書、四二頁)。かかる穀物地代は豊凶を通じて一定せずとは言え、數年間の平均によつて通常の穀物地代を構成す

る。重農學派が農業に於て前拂と呼ぶところのものは、彼れにあつてはただ年、前拂に相當する種子並びに勞働力の再生産が考慮におかれたのみで、生産手段中原、前拂とも目さるべきものの回收が考へられてゐない。けれども剩餘價值そのものを、生産過程殊に人間の勞働過程中に認めたことは天才と言はるるに値しやう。かくの如き穀物地代は貨幣經濟の當時にあつては、貨幣地代とならねばならぬ。さきに剩餘として求められたる穀物地代は現實に於ては英貨幾シリングに値するであらうか。使用價值の交換價值化は茲に於て問題となる。言ふまでもなく、『他の一人の人が、同一期間貨幣の生産に全く従事すると假定して、彼れの出費の超過として貯へうる貨幣額に等しい』(『租稅論策』前掲書、四三頁)。同一勞働時間によつて、兩使用價值物は等價たりうる。かくて價値の實體は勞働でなくてはならぬ。『若し一人の人がロンドンに向けて、一オンスの銀をペルーの産地から一ブツシエルの穀物を生産しうると同一の時間内に齎らしうるとするならば、一方は他方の

自然價格である。若し今新らしきより、豊富な鑛山のおかげで、一人の人が二オンスの銀を以前の二オンスと同様なる容易さで獲得しうるとするならば、以前五シリングであつた穀物は今や十シリングとなるであらう。『同上、前掲書、五〇―五一頁』。銀價値の下落はその相手商品たる穀物價格を騰貴せしめたのみで、穀物そのものの價値が増加したのではない。蓋し投下勞働時間は同様であるから。かかる基礎的事實がそのまま現象の世界を貫いて居るならば、何ら科學的究明の必要も、又その神祕性をもつこともありえない。『實のところ此の地盤の上に展開さるる上層建築に於ては、極めて多様且つ複雑である』(前掲、四四頁)。

地代がかくして決定されし以上、此の地代を資本化することによつて、土地價格が算定されねばならぬ。平均人が生存するだけの年數を、一年分の地代に乗すればよい。土地購買年數が即ち此の年數である。ペティはそれを廿一ヶ年と算出する。

賃料が一度貨幣に場面をかへるや、問題は更らに複

雑となる。利子と普通呼ぶところのものが貨幣賃料である。重農主義先驅者としてのペティは、利子を地代に解消せしむることによつて、その發生根據をあげく。利子も一つの剩餘價値である以上、その形成過程が先づ問題となる。ひとしく人間勞働を價値の實體と認め、その生産行程に剩餘價値の起源をたづねたペティは、然しながら土地そのものとの合體による人間勞働の價値増殖性を認めた。重農主義者の色彩を脱することが出来ぬ。かくて、彼れは一應利子を地代に解消せしめねばならなかつた。『すべて貸附金が安全を確保さるるものと假定して、その貸附金の利子は、その金^{カネ}を以て購ひうる大いさの土地の地代に少くとも一致する』(同上、前掲書、四八頁)。此れが彼れの言ふ利子の、自然的な標準であり、貸附金の不安定なる場合は、更らに利子額の増大を見るは常識の許しうるところであり、利子を地代に解消することによつて、剩餘價値そのものの根據を重農主義的見解を以て維持してゐる。